

---

# 1970年

---

## 幼児教育のめざすもの

南 信 子



一九七〇年代は、あらゆる方面において、変動、混乱の時代であると同時に、新しい建設の時代であるといつてよいのではなからうか。かかる大いなる時代に、子どもが直面する多くの問題は、直接に幼い人たちにかかわりがないように見えるかもしれないが、事実はこちらに反している。人間が幼児期にどんな生活をしたか、どんな教育を受けたかということは、その人の生涯に影響を及ぼし、それがまた、次の時代を築く力となるからである。こうした問題にすべての人が深い関心をよせなければならぬと思う。

その意味でまず幼児教育に望むことは、この困難な時代にあっても、確たる人間像をかかげ、これをめざして、子どもを育てなければならぬということである。このことは、時代をこえて、いつの世にも、絶対にかわらないことであるといえよう。こうした意味で、幼児教育が確信にみちたものであることを願ってやま

ないと同時に、保育者は子どもたちをその人間の名にふさわしく育てるといふ深い意味を理解し、その使命に生きるとともに、単なる伝統的な方法や技術に固執することなく、新しい創造的な人間を育てるためにあらゆる知恵と力とを結集しなければならないと思うのである。

今や急速な技術革新、工業化による文明の発達は、人間をも変容させる力となってあらわれ、人間をとりまいているメカニズムは、人間が人間らしく生きようとする道をきまただげ、人間は、今まさに人間として貴重な本質的なものを失わんとしているのである。この重大なときに、私もほんなどんなところに幼児教育のねらいをおくのか、どんな人間を育てなければならないのか、このことに深い洞察をもっていなければならないと思う。そこで私は次の三つの点について考えてみたい。まず人間は内面的志向性に欠けてはならないということである。

## 内面的志向性

有名なフランクフルは「人間とは人生の意味を問う存在である。否人生から問われている存在である」といったが、人生の真実や目的について深く考える人間を育てることは、昔も今もかわらない教育の大切な問題であると思うのである。近代化の傾向は、人間はみな快樂を追い、感覺的・衝動的となりやすいことである。そして人間に与えられた賜物としての考えることを放棄するに至るのである。これは誠におそろるべきことであるといいたい。ことにあたって一歩たちどまって考えることのできる人間、もっと宗教的に、絶対者の前に祈ることのできる人間を育てたいのである。それが幼児教育の中心的課題であってほしいと思う。

一昔前までは内面的志向性の人間が、社会の中心となっていたが、特に欧米では宗教教育が有能な働きをしていた。子どもの時期に、人生の真実や目的について教え、神のために生きるといふ思想が徹底的に教育され、それがその人の生活信条につよい方向を与えた例が多かったが、現代は外部志向型の人間がふえ、うつりゆくものに目をうばわれ、現実の生活を最も重要視し、外にむかって反応するだけで、人間の生きる目的や真実について考えようとしなない。現代は、自分のしたいことをするために生まれてきたといった人間が多くなると、社会心理学者は警告していることを忘れてはならないと思うのである。次に考えたいのは、責任感、連帯感を育てることである。

## 責任感、連帯感

日本人は最近世界の人から、経済的動物であるといわれたが、ごく最近また、ある外国人が日本人のことを、レジャーアニマルといったという。それは富士登山をした外国人が、マウンツフジは遠くで見る山、思う山、登ってみればゴミの山、といったことによるのである。人間が動物化する、それは倫理性を失った姿である。人間が自ら生きることの意味を見出し、その意味の前に果たすべき責任をせおうのが人間である。その責任を果たすことが、人間の歩むべき道であると思うが、人間が自分の行動に責任をもたず、それが社会の連帯意識とならないところに、社会の秩序が乱れ、平和が失なわれる原因があるのではないか、いつかフランスの母親の子どものしつけ方について感慨ふかく読んだことがある。子どもがころんだ時に、母親はすぐに手をかすことをしないで、「あなたは自分でころんだのだから、自分でおきなさい」といったという。考えさせられることである。すべてに責任の転嫁をしようとする人間の弱さに、つよくむちうって育てる教育が必要だと思うのである。幼ない子どもの小さな生活の中にも、責任を感じさせ、それを守らせる機会が多いと思う。また友だち同士の中で連帯感を育てる必要があることは誰しもが考えていることである。

次の時代に生きる人間像を考える時、こうした素材なモラルの基礎を幼児期にうちたてなければならぬと思うのである。科学

技術の進歩や、経済的伸長が、人間をして動物化し、倫理性や宗教性を解体し、人間性を喪失させることを忘れてはならないと思うのである。こうしたことの基本に、人間尊重・人格の尊厳をまもる強い信念が確立していなければならないといえよう。最後に、今日の教育的課題である創造性について考えてみたい。

### 創造性

いろいろな意味で、創造性を育てる教育が更に進展すること、幼児教育に望みたいのである。いまや教育は過去の遺産をうけつぐだけでは十分ではないのである。急速に進歩する時代に生きる人間として、新しい時代に適応し、更にいかなる変化にも適応できる人間を育てなければならないのである。過去の知識や技術や価値体系が、未来にも通用するとは考えられないことも多いといわねばならない。単に今までであった秩序に子どもを適合させる社会化、子どもにも文化遺産を受容させる文化化のみでは教育の目的は果たされないといふべきであらう。

むしろ文化の創造に目がむけられねばならないのである。また、創造性の開発は芸術教育に果たす役割りの大きいことを知らなければならぬ。美しいもの、真実なものに対して、新鮮な感覚をもちつづけさせることができるのはこの創造性である。自然の美しき、人の世の真実さに、心を驚かせ、心おどらせることのできる人間、その能力と個性に応じてのびのびと自己表現ができるように人間は導かれるべきである。そこにすぐれた文化が産み

出されるのである。幼い子どもたちにも、新鮮な感覚を養い、美しいものを愛する心を育てたいものである。音楽に文学に、絵画に、自然観察に、子どもの心は躍動し、そこから美しい人生を創り出すようにと願うのである。

また創造性は人間性の回復に役だつといえよう。その個性と能力を自由に生かすことは、人間に生きがいを感じしめるのである。社会の規範の中で、拘束された思いで生きる人生ではなく、自らの道をゆく生き方である。他人の価値判断によらず、自らの判断によって生きる道を見出すからである。

また今日の日本の教育は知識と技術を重視する教育に偏重しているのではないだろうか、〇×式のテスト、入学試験のための勉強、それは創造性を育てる教育ではない。そこには行きづまりがあり、真の教育はないのである。教育は広い意味の人間形成の教育でなければならないといえよう。そのことが、今日の日本の教育に欠けている一面であるといえるのではないだろうか。幼児期は創作的表現の黄金時代であるといわれる。すべてに驚きを感じ、好奇心にみち、探索力にあふれているこの時代に、彼らの創造性を開発することによって、次の時代に、新しいものを創造し、たくましく生きる力を養ってやることができると思う。またどんな環境にも、自分の力で生きる道を発見する原動力を養ってやることができるれば幸いである。以上は、今後の幼児教育がめざす三つの問題点であると思う。

(北陸学院短期大学)